

長崎県波佐見町の観光経済：農業と窯業の産業観光

竹 田 英 司¹
小 林 善 輝²

Abstract

The number of companies engaged in local industry in the various regions of Japan is declining, and their added value is decreasing. It is not just the number of companies that is declining; it is also the number of consumers. The Japanese government has been promoting regional revitalization through community-based tourism to increase the mean income of regional areas, focusing on the power to earn in the region. The purpose of this study is to verify the tourism economy of Hasami-cho in the Nagasaki prefecture in terms of green-craft tourism and to clarify the factors that cause tourists (consumers) to visit the region. The study of regional revitalization based on the tourism economy is useful to policymaking that is aimed at increasing the mean income of regional areas.

From this study, we learn that Hasami-cho has been transformed from a town that produces and sells porcelain tableware to one that has tourism value. This fact highlights the need to augment product value by combining local industry and tourism. Otherwise, this promising condition will not lead to the desired regional revitalization.

キーワード：観光経済学、地方創生、地域経済活性化、地場産業、産業観光

Keyword: Tourism Economics, Regional Revitalization, Regional Economy Revitalization, Regional Industries, Green Craft Tourism

目 次

1. 研究の目的と意義
 2. 先行研究の整理
 3. 学術的「問い」と検証方法
 4. 検証結果
 5. 考察
 6. 結論
- 参考文献

1 長崎県立大学地域創造学部准教授

2 特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会事務局長

1. 研究の目的と意義

日本の地方都市は企業数が減少し地域産業の付加価値額も下がっている。日本の地方都市は企業数だけではなく、人口減少の影響を受けて消費者数も減少している。日本政府は地方都市の平均所得を上げるために地域の「稼ぐ力」を重要視し、着地型観光による地方創生（＝地域経済活性化）を推進している。

本研究の目的は長崎県波佐見町の観光経済について、農業と窯業の産業観光（＝グリーン・クラフト・ツーリズム）という視点から、地方創生（＝地域経済活性化）の取り組みを検証することにある。波佐見町は窯業と農業を営んできた町である。観光経済から地方創生を検証することは、地方都市の平均所得を上げるための政策を考える上で、一定の貢献があると捉えている。

2. 先行研究の整理

2.1. 先行研究の整理①：「波佐見焼」誕生の経緯

日本でやきものが作られて400年、庶民の「器」を作り続けてきたのが波佐見町である。江戸時代、波佐見町（当時・大村藩の一部）で生産されたやきものは、伊万里港から北前船で日本中に出荷されていた。他方、柿右衛門に代表されるように有田町（当時・鍋島藩の一部）で焼かれたやきものは、江戸時代唯一の貿易港長崎に送られ、東インド会社を通じ海外に輸出されていた。「有田焼にみられるごとき発展をみず、柿右衛門に比肩する優れた名工の輩出や技術の開発が波佐見焼でみなかったのは、藩の育成政策の違いもさることながら、市場条件の差が大きな要因であった」（市川 1978、280頁）。

明治近代以降の波佐見焼は、有田駅から「『有田焼』の銘柄として全国各地へ送られていった」（市川 1978、280頁）。有田町で高級食器「有田焼」を生産し、波佐見町で日用食器「有田焼」を生産し続けてきた。「赤札商品として波佐見焼も有田焼として市場に大量に流通している」（大木 2012、16頁）。

しかし2004年に転機が訪れる。2004年当時、波佐見町で生産されたやきものは、すべて「有田焼」ラベルを貼り出荷していた。2004年に魚沼産コシヒカリ偽装表示事件、讃岐うどん偽装表示事件、ハンナン牛肉偽装事件などの産地偽装問題が起これ、肥前地域として地域ブランド「有田焼」樹立を提案した。しかし、「有田焼」は有田町のものだという意見があり、地域ブランド「有田焼」樹立は困難になった¹⁾。

1) 波佐見焼振興会（2018）109頁。

曲 折^{きよくせつ}浮^ふ沈^{ちん}あって、2004年以降、波佐見町で生産するやきものは、「波佐見焼」ラベルで出荷している。

2.2. 先行研究の整理②：ニュー・ツーリズムの特徴

ニュー・ツーリズム (new tourism) は、マス・ツーリズム (mass tourism) に対して国土交通省が用いた新しい概念である。「ニュー・ツーリズムについては、厳密な定義づけは出来ないが、従来の物見遊山的な観光旅行に対して、テーマ性が強く、体験型・交流型の要素を取り入れた新しい形態の旅行を指す。テーマとしては産業観光、エコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズム、ヘルス・ツーリズム、ロングステイ等があげられ、旅行商品化の際に地域の特性を活かしやすいことから、地域活性化につながるものと期待されている」(国土交通省観光庁 2010、2頁)。河村 (2008) によれば、ニュー・ツーリズムは地域に密着した「着地型観光」であり、ニュー・ツーリズムはこれまでの団体観光で光が当たらなかった多品種・小ロット・高付加価値型の多様な個人観光である。

産業観光推進会議 (2014) では、「観光立国推進基本計画」(国土交通省総合政策局 2007) にもとづき表1のように、ニュー・ツーリズムを整理している。その上で、産業観光推進会議 (2014) では、「産業観光は『見る』ことを中心とする従来型の観光に加えて、『学ぶ(知る)』『体験する』という三つの要素を同時に備える、新しいタイプの観光である」(31頁)と述べている。須田 (2005) によれば、「産業観光とは歴史的・文化的価値のある産業文化財(古い機械器具、工場遺構などの産業遺産)、生産現場(工場、工房等)および産業製品を観光資源とし、それらを通じてものづくりの心にふれるとともに、人的交流を促進する活動をいう」(8頁)。須田 (2005) では、マス・ツーリズムが「団体仕様の画一的な発着型観光」であるのに対して、産業観光は人々の多様な価値観を反映した「個人仕様の着地型観光」であると産業観光の特性を整理している。

公益財団法人日本交通公社 (2007) では、「見る」「学ぶ(知る)」「体験する」のが産業観光であり、産業観光を①工場見学型、②産地振興型、③一般観光型、④モノ作り人材育成型、⑤リクルーティング型に分類している。須田 (2015) では、「見る」「学ぶ(知る)」「体験する」ができる産業観光都市として、美濃焼の生産地である岐阜県多治見市・岐阜県土岐市・岐阜県瑞浪市、瀬戸焼の生産地である愛知県瀬戸市、万古焼の生産地である三重県四日市市、常滑焼の生産地である愛知県常滑市をあげ、窯業都市と呼んでいる。産業観光の中でも、クラフト(=手仕事)に焦点を当てた産業観光がクラフト・ツーリズムであり、波佐見町はクラフト・ツーリ

ズムに舵を切っている。

表1 ニュー・ツーリズムの特徴

観光タイプ	観光内容
エコ・ツーリズム	自然環境や歴史文化を対象とし、それらを損なうことなく、それを体験し、学ぶもの（ホエールウォッチングや植林ボランディアツアーなど）
グリーン・ツーリズム	農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動（農作業体験、農林漁家民泊、食育など）
文化観光	日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とするもの
産業観光	歴史的・文化的価値のある工場等やその遺構、機械器具、最先端の技術を備えた工場・工房等を対象とした観光で、学びや体験を伴うもの
ヘルス・ツーリズム	自然豊かな地域を訪れ、そこにある自然、温泉や身体に優しい料理を味わい、心身ともに癒やされ、健康を回復・増進・保持するもの
スポーツ観光	プロ・アマスポーツ観戦等の「見るスポーツ」。マラソン、ウォーキング等の「するスポーツ」への参加を目的とする観光
医療観光	外国人が日本の医療機関等での治療、診察等を目的として訪日旅行し、併せて国内観光を行う
ファッション・食・映画・アニメ等×観光	日本のファッション・食を目的とした訪日旅行、ヒット映画のロケ地訪問、アニメ関連スポットの訪問等
その他	フラワーツーリズム、長期滞在型観光等

出所：産業観光推進会議（2014）44頁、図表1-4。

井上（2011）では、グリーン・ツーリズムとは、「農村空間あるいは田園空間そのもの、そこに住む人々、ヘリテージ（文化遺産・伝統）、生活様式などを体験してもらうもの」（9頁）と定義した上で、都市住民の農村滞在型余暇活動を「グリーン・ツーリズム」と呼んでいる。農水省（1992）が「グリーン・ツーリズム」を政府公式文章に記載して以降、「ツーリズムかどうかは別にして、産直交流、山村留学、農業体験、市民農園等、グリーン・ツーリズムの前提となる都市と農村の交流は広がっている」（井上 2011、34頁）²⁾。

十和田(2011)では、観光スタイルから観光を、①有名観光地や大都市でのマス・

2) 農林水産省農村振興局公式webページによれば、グリーン・ツーリズムとは、「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」をいう。イギリスではルーラル・ツーリズム(rural tourism)、またはグリーン・ツーリズム (green tourism)、フランスではツーリズム・ベール (tourisme vert)、イタリアではアグリ・ツーリズム (agri turismo)、と呼ばれている。

ツーリズム (mass tourism)、②これまで観光地ではなかった地方都市・農山村でのオルタナティブ・ツーリズム (alternative tourism)、③長期滞在であるリゾート活動の3つに区分している。その上で、十和田(2011)では、上記のオルタナティブ・ツーリズムを、タウン・ツーリズムとグリーン・ツーリズムの2つに分け、さらにグリーン・ツーリズムを9つのタイプと27つのメニューに分類している。

3. 学術的「問い」と検証方法

前述の先行研究から整理した下記の学術的「問い」(1)(2)(3)について、次の検証を行う。①波佐見町のクラフト・ツーリズム(=産業観光)に関して、経済産業省(2019)『2018年工業統計調査表(2017年実績)：品目編』と特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会事務局長・小林善輝氏へのインタビュー調査の結果からクラフト・ツーリズムの取り組みを検証する。②波佐見町のグリーン・ツーリズムに関して、特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会・一般社団法人波佐見町観光協会・波佐見焼振興会・はさみ観光ガイド協会へのインタビュー調査の結果からグリーン・ツーリズムの歩みを検証する。③波佐見町のグリーン・クラフト・ツーリズム(=農業と窯業の産業観光)に関して、筆者が実施したアンケート調査の結果から波佐見町の観光経済を検証する。その上で波佐見町観光経済の展望について考察する。

- (1) なぜクラフト・ツーリズムなのか。
- (2) なぜグリーン・ツーリズムなのか。
- (3) なぜいまグリーン・クラフト・ツーリズムなのか。

4. 検証結果

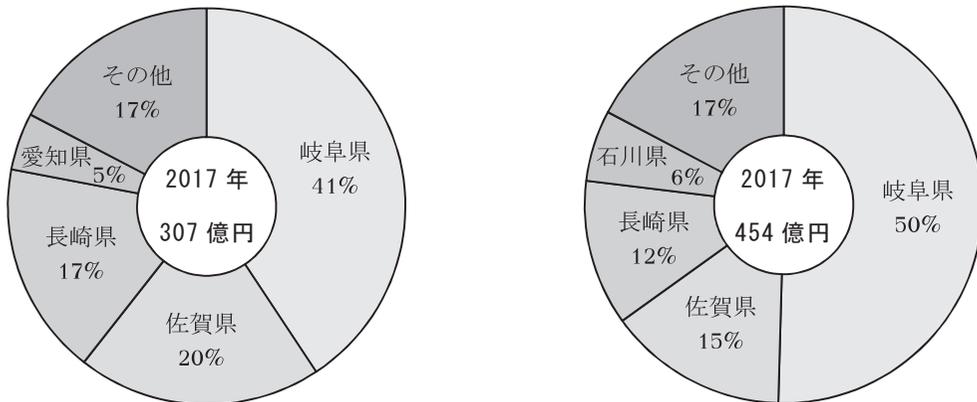
4.1. 検証結果①：なぜクラフト・ツーリズムなのか

波佐見町をはじめ日本磁器誕生の地「肥前地域」(佐賀県の唐津市・伊万里市・武雄市・嬉野市・有田町、長崎県の佐世保市・平戸市・波佐見町)は、2016年、日本遺産「日本磁器のふるさと肥前」に認定されている³⁾。図1に示されたとおり、和食器・2017年307億円の出荷額シェアは、岐阜県41%・佐賀県20%・長崎県17%の順で高く、佐賀県と長崎県を合わせた「肥前地域」の和食器の出荷額シェアは37%

3) 日本遺産「日本磁器のふるさと肥前」については、肥前やきもの圏公式webページ(<https://hizen400.jp/>)を参照されたい。

を占めている。和食器+洋食器・2017年454億円の出荷額シェアは、岐阜県50%・佐賀県15%・長崎県12%の順で高い。

図1 和食器（左図）と和食器+洋食器（右図）の出荷額シェア（2017年）



注1：左図の和食器は、「従業員数4人以上の事業所・陶磁器製和飲食器」である。

注2：右図の食器は、「従業員数4人以上の事業所・陶磁器製和飲食器と陶磁器製洋飲食器」である。

出所：経済産業省（2019）『2018年工業統計調査表（2017年実績）：品目編』から筆者作成。

産業観光の中でも、クラフト（＝手仕事）に焦点を当てた観光がクラフト・ツーリズムである。波佐見町のクラフト・ツーリズムは2004年から活発になった。表2に示されたように、波佐見町内の窯元と商社が出資して、2003年に株式会社くらわんか（波佐見町井石郷2255-2）を設立した。株式会社くらわんかが、2004年から「陶芸の館」（波佐見町井石郷2255-2）1階の観光物産館「くらわん館」を運営している。観光物産館「くらわん館」では、窯元と商社がそれぞれの出資にもとづきブースを設けそれぞれが商品を出展していて、窯元と商社が株式会社くらわんかに買付ブース代を支払うビジネスモデルである。このビジネスモデルは、商品の売り上げに関わらず管理費用が賄え、商品出展者である窯元や商社は品ぞろえを充実させることで自社の売上額が増えていく仕組みである。株式会社くらわんかでは、利益のほとんどを、補助金として波佐見町内の各イベントに出資している。

「波佐見焼」ブランドを高めるため、毎年2月に東京ドームで開催されるテーブルウェア・フェスティバル（テーブルウェア・フェスティバル実行委員会主催）へ出展している。テーブルウェア・フェスティバルでは、長崎県の支援を受けて「波佐見焼」ブースを設けている。2019テーブルウェア・フェスティバル（2019年2月

3日～2月11日開催、来場者数28万人)では、特集企画「彩の食卓カジュアルリッチ：波佐見焼」が生まれ、アイユー・石丸陶芸・一龍陶苑・一真陶苑・永峰製磁・光玉陶苑・西海陶器・重山陶器・翔芳窯・正光窯・清山・丹心窯・西山・白山陶器・浜陶・ふじた陶芸・利左エ門・和山の18社が出展した。各社が1年を掛けてコンセプトを練り、商品を作る。その結果、それぞれの窯元で個性ある商品が出展されるが、「波佐見焼」としての統一感はある。ここ数年では「波佐見焼」ブランドが消費者に受け入れられて、テーブルウェア・フェスティバルに出展しているやきものの中では、「波佐見焼」が一番集客あるブースと自負している。

表2 「農業と窯業の産業観光」の歩み（波佐見町）

年	出来事	
1959	第1回波佐見陶器まつり開催	
1984	「陶芸の館」完成	
1989	第1回陶郷中尾山桜陶祭開催	波佐見町観光協会発足
1990	波佐見陶器まつり開催期間を4月29日～5月5日に変更	
1999	鬼木棚田が全国棚田百選に認定	
2000	第1回鬼木棚田まつり開催	
2001	グリーンクラフトツーリズム研究会発足	「来なっせ100万人」宣言
2002	第1回陶郷中尾山秋陶めぐり開催	波佐見町新産業協議会発足
2003	「陶芸の館」が観光交流センターとしてリニューアルオープン	株式会社くらわんか設立
	「中尾山うつわ処赤井倉」が国登録有形文化財に登録	
2004	特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会設立認証	「文化の陶四季舎」オープン
2005	第1回皿山器替えまつり開催	
2006	西の原に「花わくすい」「モンネ・ボルト」「カフェモンネ・ルギ・ムック」オープン	
	第6回都市と農山漁村の共生・対流開催（九州農政局主催）	
2009	「陶農レストラン清句の郷」オープン	
	西の原に「イソザキ珈琲」オープン	
2010	第6回日本再発見塾イン長崎県波佐見町開催	「はさみ温泉湯治楼」オープン
2011	西の原に「南創庫」オープン	第1回波佐見再発見塾開催
2015	西の原に「にぎりめしかわち」「グロッサリーモリスケ」オープン	
	「ホテルブリスヴィラ波佐見」「ホテルエーゼット長崎波佐見店」オープン	

2016	西の原に「氷窯アイスこめたま」オープン	
2019	『ミシュランガイド福岡・佐賀・長崎2019特別版』に「陶農レストラン清旬の郷」「アルブルモンド」掲載	クラフトツーリズム産業協議会発足
2020	第1回クラフトツーリズム産業協議会全国大会開催	

出所：筆者作成。

4.2. 検証結果②：なぜグリーン・ツーリズムなのか

1991年をピークに波佐見焼の売れ上げは落ち込んだ。窯業の将来に不安を感じていた2001年ごろに、日本国内に農村回帰の動きが出てきて、グリーン・ツーリズムの活動が始まった。2001年から波佐見町長・一瀬政太氏が「来なっせ100万人」をスローガンに掲げている⁴⁾。波佐見町でも農村回帰とグリーン・ツーリズムの流れに乗り、2001年にグリーンクラフトツーリズム研究会を立ち上げ、2004年には特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会が設立認証された。

グリーン・ツーリズムもクラフト・ツーリズムと同じく2004年から活発になった。特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会では、観光客が訪れ始めていた陶郷中尾山に交流拠点「文化の陶四季舎」（波佐見町中尾郷660）を作り、観光客が「文化の陶四季舎」で食事や休憩ができるように取り組んだ⁵⁾。

波佐見町は、「生産のまち」から「観光客を受け入れるまち」へと変わってきている。2006年には廃業した波佐見温泉の再生を目指して、特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会がプロジェクトを立ち上げた。まず波佐見町が源泉を採掘して温泉施設を整備した。次に波佐見町内外から資本金7千万円を募り、補助金7千万円と合わせて「陶農レストラン清旬の郷」（株式会社はさみ温泉ファーム）と「はさみ温泉湯治楼」（株式会社はさみプロジェクト）が創業した。2006年から4年掛けていまの形を作り、2009年に「陶農レストラン清旬の郷」、2010年に「はさみ温泉湯治楼」がオープンを迎えるに至った。「陶農レストラン清旬の郷」の名物ピッツァは、『ミシュランガイド福岡・佐賀・長崎2019特別版』（338頁）に掲載されるまでの評価を得ている。

4) 波佐見町では、窯業の落ち込みによって町内に活気がない中、町外からたくさんの人に来ていただいて町内を元気にするため、「来なっせ100万人」というスローガンを唱え産業観光に力を入れている。

5) 一般社団法人波佐見観光協会によれば、「陶郷中尾山」（波佐見町中尾郷）一帯は、波佐見焼400年の歴史の中でも、地域全体がほぼやきもの一色に染まった独特の地勢と、歴史風土をそのままに現代に残している波佐見町内でも独自の個性と雰囲気を持った地域である。

表3 2019年「農業と窯業の産業観光」の取り組み（波佐見町）

取り組み	取り組み内容	該当数	取り組み事例
山村留学	山村留学の実施	なし	
自然留学	自然教室・自然観察会等の実施	1	天体観測体験
修学旅行	修学旅行・実習の受け入れ	1	学校法人角川ドワンゴ学園N高等学校
収穫体験	果樹等の収穫体験	5	ニホンミツバチ養蜂体験など
農業体験	農林漁業の体験	9	田植え・稲刈り・酒器絵付（ザ酒塾）など
加工体験	農林水産物の加工・調理体験	12	無添加味噌作り体験など
工芸体験	モノづくりの体験	13	波佐見焼下絵付け体験など
文化体験	伝統的文化・行事の体験	5	皿山人形淨瑠璃体験など
農家民泊	農家民泊・行事の体験	7	美のり窯（窯家民泊）など
村内めぐり	村内めぐり・祭りの見学	3	ガイドと歩く中尾山路地裏めぐりなど
交流会	交流会・懇親会の開催	1	波佐見町朝飯会
郷土料理	郷土料理などの提供	4	文化の陶四季舎「はさみ焼御膳」など
地元イベント	地元でのイベント・大会を開催	25	波佐見陶器まつりなど
都市イベント	都市でのイベント・物産展に出展	4	テーブルウェア・フェスティバルなど
特産品販売	特産品・地場産品の地元販売	1	くらわん館（陶芸の館）
特産品宅配	特産品・地場産品の宅配	1	くらわん館（陶芸の館）
広報送付	広報・PRパンフレットの送付・配布	2	波佐見町観光協会など
オーナー	田畑・樹木などのオーナー制度	なし	
貸し農園	貸し農園・市民農園の整備・運営	なし	
体験施設	体験施設の整備・運営	1	西の原ボルダリングスタジオ833 WALL
宿泊施設	宿泊施設の整備・運営	2	ホテルブリスヴィア波佐見など
物販施設	物産販売施設の整備・運営	67	くらわん館（陶芸の館）など
飲食施設	飲食施設の整備・運営	27	文化の陶四季舎など
レジャー施設	レジャー施設の整備・運営	1	ミニオートキャンプ場（2022年完成予定）
休憩施設	休憩・休養施設の整備・運営	1	はさみ温泉湯治楼
文化施設	文化施設の整備・運営	4	野外博物館世界の窯広場など
空家利用	空家・廃校等の利用・斡旋	4	西の原（旧福幸製陶所利用）

注1：表中の取り組みは、観光客が参加できる取り組みに限定している。

注2：「都市イベント」は、企業個別の物産展や展示会は該当数に入れていない。

出所：十和田（2011）116頁、表7-1「グリーン・ツーリズムの取り組みメニューの分類」に従って、特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会・一般社団法人波佐見町観光協会・波佐見焼振興会・はさみ観光ガイド協会へのインタビュー調査の結果、および波佐見町観光協会（2019a；2019b）から筆者作成。

2004年に特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会と井手修身氏（2004年当時、定期刊行物『観光会議きゅうしゅう』編集長）がアートデザイン村構想を作成した。アートデザイン村構想は、若い人が自由にモノづくりできる場所、販売や展示ができる場所、訪れた人がやきものづくりを体験できる場所を波佐見町に作る構想だった。しかしアートデザイン村構想を実現するためには、住民の理解や行政手続きなどの時間と労力がかかり進めるのは不可能だった。

このような行き詰まり感の中、西海陶器株式会社が旧福幸製陶所（幸山陶苑）の敷地5,000㎡と建物を購入して、アートデザイン村構想を「西の原」（波佐見町井石郷2187-4）で実現していくことになった。いまの「西の原」を明確に描いていたわけではなく、若い人たちに場所を貸し出すことから始めた。山形市から移住した陶芸家・長瀬渉氏が「西の原」で工房を開き、そこに数名のやきものづくりを目指す若者が居候的に集まってきた（現在は「ながせ陶房」（波佐見町井石郷417-2）へ移転）。

2006年、全国をバイクで周っていた故・岡田宏典氏（東京都出身）が「西の原」でカフェモンネ・ルギ・ムック（飲食店）を始めた。このころ併せて花わくすい（雑貨店）、モンネ・ポルト（雑貨店）がオープンしている。岡田宏典氏ら若い人は、「長い年月をかけてできた古い製陶所建築物にこそ他と差別化できる価値があり、新しく建てる建物には魅力がない」と強い信念を持っていた。岡田宏典氏ら若い人が築き上げた「西の原」は、2019年現在、1年間に15万人が訪れている。

4.3. 検証結果③：なぜいまグリーン・クラフト・ツーリズムなのか

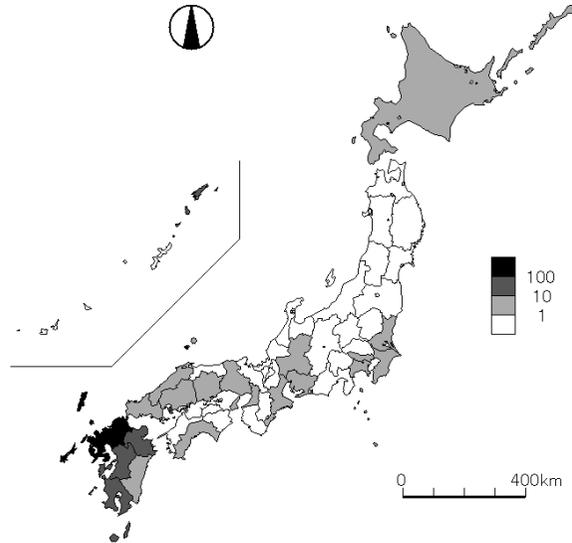
波佐見町では、「来なっせ100万人」を合言葉に2001年から交流人口拡大を目指し、農業と窯業の産業観光（＝グリーン・クラフト・ツーリズム）を推進してきた。図2は、筆者が実施したアンケート調査の結果から、波佐見町観光客の住所を示したものである⁶⁾。波佐見町の観光客917組は、長崎県493組(54%)、福岡県182組(20%)、佐賀県125組(14%)、熊本県31組(3%)、大分県17組(2%)の順で多く、九州地方からの観光客が94%(867組)を占めていた。波佐見町観光客917組のうち、レンタカー利用者は8%(長崎県32組、福岡県26組、佐賀県5組、大分県4組、熊本

6) アンケート調査の概要

- ・調査日時：2019年6月16日（日）、6月30日（日）、9月23日（月・祝）の計3日間
- ・調査場所：くらわん館、西の原、OYANE、（中山交流館含む）四季舎
- ・調査対象：各調査場所に駐車した観光客917組
- ・回答数（回答率）：898組（98%）
- ・調査方法：聞き取り調査

県2組、宮崎県1組、大阪府1組の計71組)であった。

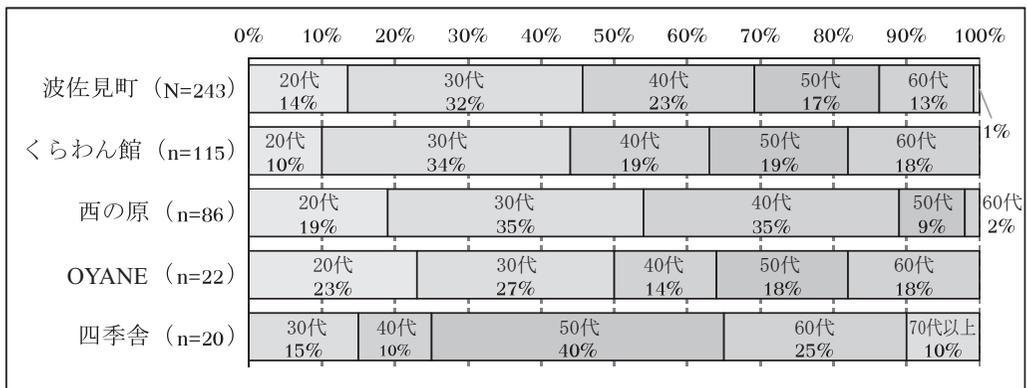
図2 2019年波佐見町観光客の地域性 (N=917)



出所：筆者が実施したアンケート調査の結果から作成。

図3は、筆者が実施したアンケート調査の結果から、波佐見町観光客の年齢層を示したものである⁷⁾。「40代以下」の観光客が占める割合は、「波佐見町」69%、「くらわん館」63%、「西の原」89%、「OYANE」64%、「文化の陶四季舎」64%の順

図3 2019年イベントが有る休日の観光客年齢層 (N=243)



出所：筆者が実施したアンケート調査の結果から作成。

7) アンケート調査の概要

・調査日時：9月23日(月・祝)

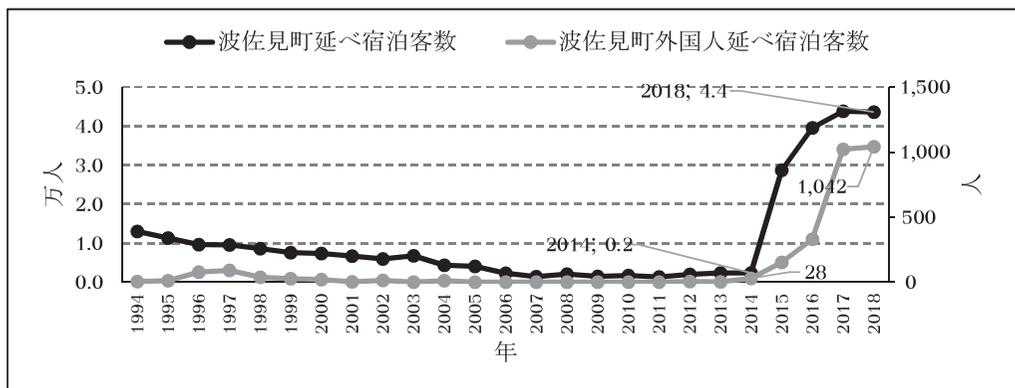
で多かった。上述したアンケート調査の結果から、波佐見町は「九州地方」に住む「40代以下」の若い世代にとって、「訪れる価値のある町」であるといえよう。

5. 考察

消費者にとって波佐見町は「やきものを生産・販売する町」から「訪れる価値のある町」に変わり始めている。図4左目盛りに示されたとおり、2015年以降は波佐見町で宿泊客が増えている。波佐見町延べ宿泊客数は、2014年0.2万人から2018年4.4万人に増えている。日本国内の訪日外国人旅行者数は、図5に示されたとおり、2014年1,341万人から2018年3,119万人に増えている。訪日外国人旅行者数が増えた影響を受けて、波佐見町の外国人宿泊客数も急激に伸びている。波佐見町外国人延べ宿泊客数は、図4右目盛りに示されたとおり、2014年28人から2018年1,042人に増えている

図6左図に示されたとおり、2018年訪日外国人旅行者3,119万人のうち、中国・韓国・台湾・香港・タイが77%（2,402万人）を占めている。他方、図6右図に示されたとおり、2018年波佐見町外国人延べ宿泊客1,042人のうち、中国・韓国・台

図4 波佐見町の宿泊客



注：図中の「延べ宿泊客数」は宿泊観光客の延べ宿泊数合計値である。

出所：長崎県観光振興課（1995；2019）『長崎県観光統計』各年から筆者作成。

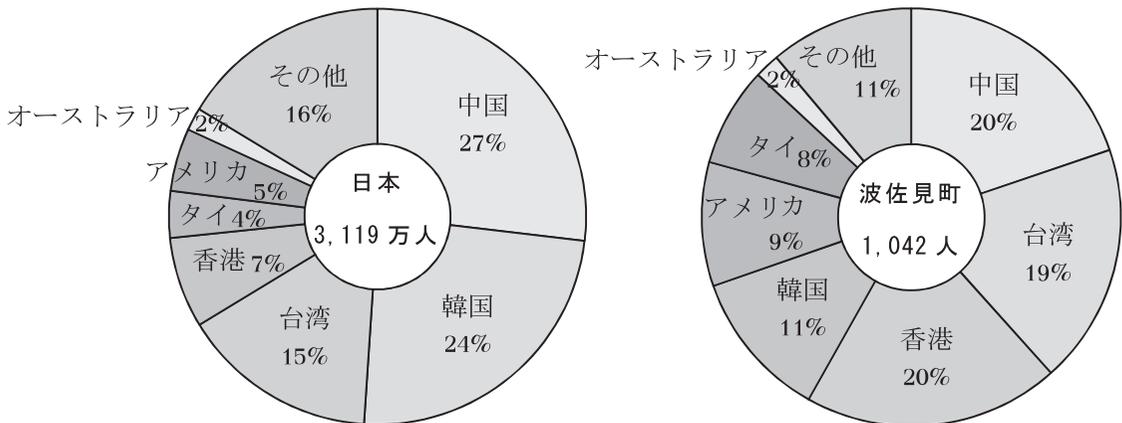
- ・調査場所：くらわん館、西の原、OYANE、(中山交流館含む) 文化の陶四季舎
- ・調査対象：各調査場所に駐車した観光客243組
- ・回答数(回答率)：243組(100%)
- ・調査方法：聞き取り調査

図5 訪日外国人旅行者数



出所：日本政府観光局（2019）から筆者作成。

図6 2018年訪日外国人観光客の構成（日本（左図）・波佐見町（右図））



注：図中の「延べ宿泊客数」は宿泊観光客の延べ宿泊数合計値である。

出所：日本政府観光局（2019）と長崎県観光振興課（1995；2019）『長崎県観光統計』各年から筆者作成。

湾・香港・タイが77%（806人）を占めている。今後、これから訪日外国人旅行者が増えれば、波佐見町でも同様に訪日外国人旅行者宿泊客が増えるであろう。波佐見町では、中国・韓国・台湾・香港・タイの海外個人旅行者（FIT；foreign independent traveler）向けに、3～4時間の日帰り農業・窯業体験コースや、1泊2日～2泊3日の農業・窯業体験コースなど、高単価・滞在コンテンツの開発と実施が必要である。空き家や空き製陶所を使った宿泊施設を中心として、波佐見町全体に小さなビジネスを生み出し、それらをネットワークでつないで観光資源を作り出したい。空き家や空き製陶所を再利用して宿泊施設とし、町全体に点在するサービ

スと結びつけて観光客をもてなす「アルベルゴ・ディフーズ（分散した宿）」が波佐見町でも可能か、特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会で検討している⁸⁾。

6. 結論

本研究から長崎県波佐見町を訪れる観光客は、「40代」以下の観光客が全体の69%を占めていて、九州地方からの観光客が全体の94%を占めていることがわかった。消費者にとって波佐見町は「やきものを生産・販売する町」から「訪れる価値のある町」に変わり始めている。日本各地の地場産業を取り巻く環境は、人口減少・生活スタイル・嗜好^{しこう}の多様化などにより規模が縮小している。しかし地場産業を形づくった歴史や文化、そこから見い出される商品価値は日本にとってかけがえのない大きな財産である。地場産業の生産地は、歴史的価値や文化的価値を有し、日本の地場産業とその商品価値は世界が認めている。農業や地場産業と産業観光を組み合わせる新しい商品価値を創発しなければ、地方創生（＝地域経済活性化）に辿り着けないと結論づける。

謝辞

インタビュー調査にご協力いただいた特定非営利活動法人グリーンクラフトツーリズム研究会・一般社団法人波佐見町観光協会・波佐見焼振興会・はさみ観光ガイド協会の皆さまへ、心より感謝を申し上げます。

付記

本研究は、長崎県立大学2019年度学長裁量教育研究費による成果の一部である。

参考文献

- 一般社団法人波佐見町観光協会（2019a）『とうのう2019春夏保存版：まるごと波佐見体験』。
一般社団法人波佐見町観光協会（2019b）『とうのう2019秋冬保存版：まるごと波佐見体験』。
市川信愛（1978）「やきもののふるさと：波佐見町」、板倉勝高編著『地場産業の町（上巻）』古今書院、275-287頁。
井上和衛（2011）『グリーン・ツーリズム：軌跡と課題』筑波書房。
大木裕子（2012）「有田の陶磁器産業クラスター：伝統技術の継承と革新の視点から」『京都マネ

8) 「アルベルゴ・ディフーズ」については、中橋恵（2017）を参照されたい。

- ジメント・レビュー』京都産業大学マネジメント研究会、21、1-22頁。
- 河村誠治（2008）『新版観光経済学の原理と応用』九州大学出版会。
- 経済産業省（2019）『2018年工業統計調査表（2017年実績）：品目編』経済産業調査会。
- 国土交通省総合政策局観光政策課（2007）「観光立国推進基本計画」。
- 国土交通省観光庁（2010）『ニュー・ツーリズム旅行商品創出・流通促進ポイント集2009年版』。
- 公益財団法人日本交通公社編（2007）『産業観光への取り組み』日本交通公社。
- 産業観光推進会議（2014）『産業観光の手法:企業と地域をどう活性化するか』学芸出版社。
- 須田寛（2005）『産業観光読本』交通新聞社。
- 須田寛（2015）『産業観光：ものづくりの観光』交通新聞社。
- 十和田朗（2011）「農山村と観光：グリーン・ツーリズムの実践と課題」、原田順子・十和田朗『観光の新しい潮流と地域』放送大学教育振興会、113-126頁。
- 長崎県観光振興課（1981；2019）『長崎県観光統計』長崎県観光振興推進本部。
- 長崎県波佐見町公式webページ（<https://www.town.hasami.lg.jp/>）。
- 長崎県波佐見町観光協会公式webページ（<http://hasami-kankou.jp/>）。
- 中橋恵（2017）「廃村危機の救世主アルベルゴ・ディフーズ」、松永安光・徳田光弘編著『世界の地方創生』学芸出版社、49-80頁。
- 日本政府観光局（2019）「年別訪日外客数、出国日本人数の推移」（<https://www.jnto.go.jp/>）。
- 日本ミシュランタイヤ（2019）『ミシュランガイド福岡・佐賀・長崎2019特別版』。
- 農水省構造改善局（1992）『グリーン・ツーリズムの提唱：グリーン・ツーリズム研究会中間報告書』。
- 農林水産省農村振興局公式webページ（<https://www.maff.go.jp/j/nousin/>）。
- 波佐見焼振興会（2018）『波佐見は湯布院を超えるか』長崎文献社。
- 肥前やきもの圏公式webページ（<https://hizen400.jp/>）。